

長田下地域自治 振興会だより 第38号

2020年(令和2年)11月26日発行

友愛訪問活動 9月22日～

振興会事業として各役員が、対象者の方へ友愛訪問活動を行いました。

内容は、敬老事業として75歳以上の方に敬老お祝い品(商品券)の贈呈と、80歳以上の方への訪問活動(ご長寿お祝い)でした。

長田下地域自治振興会内では、75歳以上の方は82名、その中で80歳以上の方は64名いらっしゃいます。皆さんお元気にお過ごしでした。これからも、どうぞお元気にお過ごしください。

長田下地域内には約320人の方がお住まいです。改めて、健康で過ごせることの有難さを感じながらの訪問活動でした。(K.M)



ソバ種まき活動 8月9日

8月9日、下長田の地域共同畑での活動に子ども会が参加してくれました。整備された畑で、ソバ活動の人の指示に従って、「三密」に注意しながら、子ども達がソバの種子をまきました。うまく生えるといいですね。この地域は子ども達が多い地域で元気が出ます。

今年は、新型コロナへの対応で、ソバ祭りはありませんが、このような経験を子ども達が楽しんでくれるとうれしいですね。(T.K)



下長田地域の新しい仲間を紹介します！

田中陽可さん・奈織さん

- 長田 5 区の旧西村邸に 5 年間住まわられていた木下さんが転居された後、4 月から結婚されたばかりの若い御夫婦が新生活をスタートされました。

御主人の田中陽可^{ようか}さんは、東京都渋谷区出身の 29 歳、奥様の奈織^{なお}さんは、広島市安芸区出身の 27 歳です。

- さかのぼること 6 年前、アメリカの大学を卒業された陽可さんと学生だった奈織さんが、3ヶ月半で 20ヶ国を船でまわる「ピースボート」に通訳とスタッフとして参加されたのが、お二人の出逢いでした。
- その後、陽可さんは、5 年間、群馬で地域おこし協力隊として農業に従事。肥料や農薬を使わない自然栽培での野菜作りをされていました。

一方、奈織さんは、海外で核実験のヒバクシャについて研究されるなかで、農業がしたいと思われるようになったそうで、「ピースボート」の友人に誘われて群馬に行かれ、自然栽培に共感すると同時にお二人の距離もぐっと縮まったそうです。遠距離でのおつき合いは続き、広島を離れたくない奈織さんの想いをくんで、陽可さんは、住み慣れた群馬を離れることになりました。

- 移り住んで半年、陽可さんは、群馬で作られていたさつまいもの干しいもの生産販売を主力にすべく、来年のさつまいも収穫を目指し、“じゅるい”田んぼと格闘中です。（ごちそうになった干しいものは、甘みが凝縮されておいしかったです。）そして、いろんな人に田舎ぐらしを体験してもらう農家民泊を軌道にのせたいそうです。

奈織さんは、4 月から安芸高田市地域おこし協力隊で多文化共生推進事業のお仕事をされており、日本語教師の資格も取りたいそうです。お話を伺っていて、いも保管用の納屋や蔵、お客様を迎える離れもある、芸備線沿いに建つ大きな家をお二人が気に入られた意味がわかりました。

- 広い和室は、ヨガ教室や子ども向け英会話教室（中・高生の受験英語も OK。生徒募集中！）、プロジェクターでのミニ上映会にと大活躍しそうです。一方、コロナウイルスの影響で、数々の地域行事が中止となり残念がっておられます。

地域の人と仲良くなりたいたいと奈織さんは、夜の散歩を始められました。大阪より西に来られるのは初めての陽可さんと、道の駅めぐりが好きな奈織さん。ドライブで息抜きしつつ、この地に根ざして、新しい種をまいてください。応援しています。



友人が創ってくれた切り絵をバックに

下長田地域の新しい仲間を紹介します！

カタクタン・ジェスンさんと矢野智美さんの家族

長田7区下、元谷川邸を昨年12月ごろ購入され、リフォームをされました。今年の9月に、家族全員の引っ越しが終わったそうです。

家族はカタクタン・ジェスンさん（37歳）と矢野^{ともみ}智美さん（33歳）のご夫婦と長女の矢野^{あいり}愛織ちゃん（6歳）と次女の矢野^{ゆみこ}結実子ちゃん（4歳）の4人です。

ジェスンさんは、フィリピン人で、韓国の大学で仕事をされている時、韓国に行かれた智美さんと出会い結婚されたそうです。智美さんの実家は広島市東区で、ご両親が居られるとのこと。家族は、3年前までは、ジェスンさんの実家のあるフィリピンで生活されていましたが、子どもを日本で育てたいと考え、矢野さんの実家のある広島に帰って来られたそうです。

下長田に来られたきっかけは、ジェスンさんの勤め先が安芸高田市にあったこと、もう一つは、智美さんの祖母が戦時中、向原に疎開していたことだそうです。そして、ここ7区下に来られて、地域の方が親切で「ここなら、近所付き合いができる」と思い決められたそうです。

ジェスンさんのフィリピンでは、隣近所が仲良しで、いつもにぎやかだったそうで、日本での生活（広島市内）では、少し寂しく思っていたそうです。ただ、ジェスンさんは英語は得意だそうです、日本語はまだしゃべれないとのこと。

ジェスンさんは、農業にすごい関心があり、ここ谷川邸に入ってから、早速、谷川さんより農業のやり方を教わり、もう米作りを体験されたということです。また、6区の田植憲司さんの所でビニールハウスを使った野菜作りなどを勉強中だそうです。

智美さんもとても明るい人で、私が、突然、家に訪ねて行った時も、すぐに「上がって、上がって」と言われ、快く迎えてくれました。お腹には3人目の赤ちゃんがおりると聞きました。また、簿記の資格を持っておられ、今は、井原の田邊^{たなべ}農園で経理の仕事をしているそうです。二人の子どもさんも人見知りもせず、直ぐ話しかけてくれました。とても可愛かったです。

もう地域の行事等には家族全員で参加されており、皆さんもご存知の方が多いと思います。出会ったときには「気軽に声をかけてほしい」と言われていました。

この若い力で、ぜひ地域を盛り上げてほしいですね。 (Y.H)



『長田下地域の文化財保護と伝承』について考える②

前回は、長田下地域に残る「古民家の立地条件」などについて書きましたが、今回は、民家の「間取り」を中心に考えてみたいと思います。

「間取り」というのは、部屋の配置のしかたのことですが、皆さん方の家は、どんな間取りになっていますか。現在は、洋式の部屋なども取り入れられていますが、ひと昔前はどの家もおおかた似たような間取りになっていたのではないかと思います。

民俗学の本によりますと、昔の農家の間取りの基本型は、「土間と床上四間」と書いてありましたので、玄関を入ると、土間があり、左側に4つの部屋があるというのが基本のようでした。では、私たちの小さい頃のことを思い出しながら、古い時代の母屋の間取りについて、昔の長田の言葉で調べてみます。

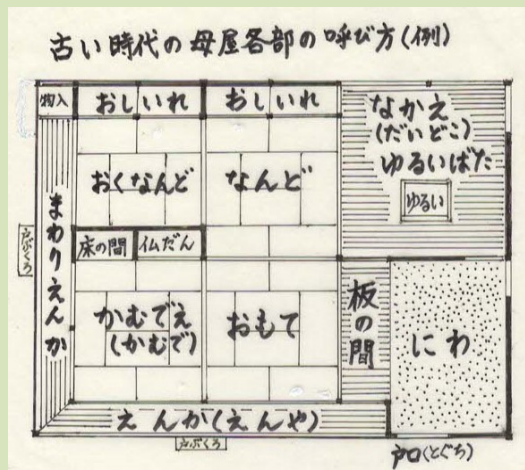
まず、玄関（戸口《とぐち》）を入ると、ほとんどの家は土を固めた土間（にわ）がありました。下の写真のように、「にわ（なかにわ）」には、むろ（芋などの貯蔵庫）や戸棚、餅つきの唐臼（からす）があり、中には風呂を据えている家もありました。「にわ（なかにわ）」の左側には、板の間や上がり段（あがりがまち）があり、障子を開けると「おもて」。次の間が「かむでえ」となっていて、「かむでえ」には仏壇や床の間がありました。

「にわ」の奥は、台所（「だいどこ」とか「なかえ」と言っていた）で、「ゆるい」（いろり）があったので、「ゆるいばた」とも言っていました。「ゆるいばた」の横には、土やセメントで作った「くど」（かまど）や、水がめなどがありました。

「だいどこ」の間のとなりが、「なんど（納戸）」と言って、タンスがあったり、物置部屋になったりしていました。大きな家には、「なかなんど（中納戸）」があり、寝室などに使っていました。そして、そのとなりが、「おくなんど」と言い、年寄りなどの寝室になっていました。「おくなんど」や「なんど」には、「おしいれ（押入）」があり、ふとんや座布団、着物などを収納するようになっていました。

ついでに、母屋の前側や「かむでえ」の横には、板でできた「えんか（または、えんや）」（縁側のこと）があり、雨戸（板の戸）を収める「とぶくろ（戸袋）」がありました。今日では、雨戸はほとんど、ガラスサッシになっています。また、トイレは、今は水洗トイレが家の中に設置されていますが、昔は、小便所は母屋の横の壁に簡単な便器が付いていたり、「だや」（牛や馬を飼う部屋）の中の一角に、大・小便所がありました。ほとんどの家庭は、トイレが母屋の外にありました。昔は、トイレのこと（特に、大便所）を「せんち」とか「せっちん」、「ちようず」と言っていました。

古い時代の母屋の呼び方を探ってみました。時代の変化とともに、私たちの家屋も進化し改良されながら、快適な生活ができるようになりました。(F.T)



市内の古民家の土間（にわ）